

蘇山人句における詠史の意味

—蕪村受容を中心に—

劉 迎

一、はじめに

たいていの人が「蘇山人って誰？」と思つただろうが、彼は明治俳壇において唯一の中国人俳人として活躍し、(夙に俳諧を好んで、交を四方に求め、俳席あるごとに彼の姿を見ざることは稀であつて)(太田南岳「蘇山人」「木太刀」十四卷四号、大五・五)、(日本語を善くする事邦人に異ならず、蘇山人と戯號して俳句を吟じ小説をつゞりては常に吾等を後に瞻若たらしめた才人である)(永井荷風「日和下駄」初山書房、大四・六)と評される青年俳人であつた。

蘇山人の出自については、伝えるところ甚だ少なく詳かではないが、まずは「日本近代文学大事典卷三二」(日本近代文学館、昭五二・一一)の記述および彼の師友の回想などをもとに概観する。蘇山人は光緒七年(一八八一)、中国の蘇州(一説は長崎)に清国公使館通訳官羅庚齡の長子として生まれた。母は小島氏、日本人である。本名は羅朝斌、俳号は蘇山人、臥雲なども号した。彼は幼時より中国古典の薰陶を受け取るとともに、また長く日本

に住し、日本語をよくし、日本の文章や、特に俳句に巧みで、新派勢力の二中心と目された秋声会、紫吟会、木曜会に参加するほか、また正岡子規の門をたたき日本派に属して、尾崎紅葉・巖谷小波・永井荷風・野口寧齋・正岡子規・高浜虚子・河東碧梧桐など明治文壇屈指の文学者と親しく交わつていた。明治三三年(一九〇〇)の夏頃、湖広総督張之洞の新政に協力すべく中国湖北省の官衙に赴任したが、胸疾患のため間もなく日本に戻り、明治三五年(一九〇二)三月二四日、子規に先立つこと半年、東京赤坂の寓所にて惜しくも早世した。享年二十一。

蘇山人が俳壇において活躍するのは、主として明治三〇年から明治三四年まで(一八九七―一九〇一)のわずか五年間であるが、俳句に対する情熱には凄まじささえ感じさせるものがあり、諸雑誌や新聞に四百余句を投じたほか、また小説、童話、漢詩、新体詩なども多く発表して大いに異彩を放っている。その句作が子規・虚子・碧梧桐・紅葉・小波らと並び、「春夏秋冬」(正岡子規・高浜虚子・河東碧梧桐編、明三四・五―三六・一)、「明治俳句」

〔竹村秋竹編、明三四・九〕、『俳諧新潮』(尾崎紅葉編、明三六・九)、『明治百人十句』(吉野臥城編、明四三・九)、『三代俳句集』(改造社編、昭一四・六)など明治俳壇を代表する数多くの句集に収められ高く評価されている。

筆者は蘇山人の俳句を当時の新聞・雑誌・俳書などから出来るだけ広く蒐集し、その三分の二にあたる三四八句を捜し得ている。その多くは写生趣味の他に一面に於いて漢詩文を取り入れ、格調の上に中国古典に基づく高雅な古典趣味と豊潤な感覚美をもって彩られ、著しく蕪村調の影響を受けていることが見受けられる。

本論では、明治期における蘇山人の作句活動を確認しつつ、蘇山人句における蕪村の受容について特に詠史句を中心に検討し、彼が自らの俳句の根柢を獲得するさまを明らかにしていきたい。

二、正岡子規とのかかわり

蘇山人が蕪村に興味を持つようになったのは、正岡子規と深い関係があると思われる。蘇山人と子規との接点について、加藤国安氏は『漢詩人子規―俳句開眼の土壌―』(研文出版、二〇〇六・一〇)の中で、蘇山人の父羅庚齡の上司たる清国公使黎庶昌と子規の母方の叔父藤野漸の長兄にあたる藤野海南との親交に注目し、(あるいは蘇山人は父親を介して、藤野海南が子規の縁戚筋にあたることを聞いていたのかもしれない。子規の蘇山人に対する態度には、この海南の親情的姿勢、つまりは国を超えた所で人間を

深く理解する高い理性があると感じられる)と述べて、大要興味深いことを指摘しているが、それが確実だという証拠はないため、筆者は敢えて取り上げないこととする。

それでは、蘇山人がいつから俳句に興味を持つことになったか、また何人に俳句を学んだかは定かではないが、実は子規と出会う前に、明治三〇年(一八九七)頃から、蘇山人は同じく新俳風を主張した「硯友社」系統の紫吟社・木曜会・秋声会などに入り込んでいたのである。紫吟社は(俳諧は實に観察が鋭く、寸句で非常に力の強い言ひ廻しをする。之れを小説家として学ぶべしで、移して以て文章を煉るに適す)るという尾崎紅葉の主張にしたがって創立した俳句結社で、やがて紅葉、巖谷小波、角田竹冷らを中心とした秋声会へと発展していったが、蘇山人はそこで知り合った小波の木曜会にも入り、永井荷風なども伴い行ったのである。紫吟社・木曜会・秋声会での蘇山人の作句および紅葉・小波らとのかかわりについての検討は別稿に譲ることにするが、いずれにしても、この時期における蘇山人の俳句への精進ぶりには目覚ましいものがあり、『俳諧秋の声』『俳声』『文華』『新小説』などに発表した作句がすでに二百句を超えており、また紅葉選『俳諧新潮』にも数句入集していることから、彼は相当の待遇を得ていたであろうと推測される。

秋声会は最盛期に四〇名余の会員を有し、俳句革新運動の一勢力をなした時もあったが、大会の外は一定の例会を持つておらず、

日本派に比べて作句面は振るわないため、何時となく立ち消えの姿となり、また木曜会も小波の渡欧のため、活動が中止してしまつた。そうした中、蘇山人は当時「青年俳客」の圧倒的支持を得て、日本俳壇を席捲していった日本派に接近し、子規の教えを受けることになつたと考えられる。

子規は文科大卒（今の東大）を中退してすぐに「類祭書屋俳話」（明二五・六―一〇）を新聞「日本」に連載して、旧派の月並俳句を否定し、二九歳からは病床にありながら、「嗚いて血を吐くほととぎす」の如く精力的に「写生」を説き、（書生の、書生のための、書生による）俳句革新運動を展開した。創作理論としての「写生」は、子規が明治三五年（一八九二）に、「蕪村句集」（高井凡菫編、天明四年）を発見し、蕪村に写生俳句の極致を見出して発展させたものである。さらに子規が明治三二年（一八九九）一月に上梓した『俳人蕪村』では、〈百年間空しく瓦礫と共に埋められて光彩を放つを得ざりし者を蕪村とす。蕪村の俳句は芭蕉に匹敵すべく、或は之に凌駕する處あり〉と述べ、蕪村の句風を特徴づけるものとして積極的美、客観的美、人事的美、理想的美、複雑的美、精細的美といったものを挙げて、蕪村の句の長所をあぶり出している。

その影響下で子規一門の関心は蕪村に傾き、蕪村の句にこれからの俳句の行先を見ようとし、そのように蕪村を解釈した。彼らは埋もれようとしていた蕪村の『新花摘』を翻刻し、またその研

究に熱心だつた水落露石は「蕪村の原稿」などの論文を俳誌「ほととぎす」に掲載したりすることにより、明治俳壇において一気に蕪村ブームを起こしてきた。こうした俳壇の動きに常に関心を寄せていた蘇山人は、恐らくこれらの文章を読んで啓発されたのであろう。

明治三一年（一八九八）一〇月、子規は伊予松山から上京して、日本派の活動中心も東京に移つた。俳句革新の旗標を翻して殺到した日本派は、「ほととぎす」を拠点に全国的に発信し、新派の俳句と写生句の理念を浸透させてすぐに明治俳壇の中心となつたのである。

蘇山人は明治三一年一〇月東遷以後の「ほととぎす」誌上に句を投じはじめ、その第二巻第一号（明三一・一〇）の「募集俳句」欄に

蜻蛉の飛びくたびれて釣の糸（子規選）

鱸買はん呉人の杖に蜻蛉かな（子規選）

ぬかるみに蝨飛込む牛車（四方太選）

さんと笠にはたと伏せたりきりくす（虚子選）

瘦詩人欄に蚯蚓を聞く夜かな（虚子選）

など七句が入選して、その才能が早くも子規・虚子らによって認められた。

その後、蘇山人は一段と句作に没頭するようになり、「ほど、ぎす」に毎号のように投句したが、さらに紅葉と子規との両派に「またがる俳友の梅沢墨水・吉野佐衛門の紹介で、明治三二年（一八九九）二月二四日、子規庵例会にはじめて出席し、子規・虚子・碧梧桐ら日本派の人々と相識り、直接に子規の教えを受けることになる。当日の蘇山人の様子を「ほど、ぎす」(二巻六号、明三二・三)の「通信」欄には次のように記述している。

「清人蘇山人二月の例会に列し候。辮髮唐服甚だ異彩を放ち候。寧ろ異彩を放つものは其の句に有之候。氏年齒尚ほ若、頗る日本の文學を嗜むと。俳句に於ても自ら凡ならざるもの有之候。」

薄紫の緞子の清国服に辮髮を垂れている蘇山人の瘦身姿は人々の注目を惹かずにはおかなかつたが、会者を睨目たらしめたのは、むしろ(俳句に於ても自ら凡ならざるもの有之)と言われた彼の持つ作句の力であった。(片手間や余技ではなく、立派な一流の作者と目すべき眞の俳人であった)(河東碧梧桐「明治俳壇の追憶 二十」『俳句研究』四巻二号、昭二二・二)とか、(數年前亡くなつた支那人でありながら俳句をよくして、斯道の大家に肩をならべる程であつた)(沼波瓊音「嘲」南江堂書店明三八・九)といった評価の言葉がそのことを物語っている。たとえば、

野の茶屋に草鞋一足春の風 (露月選)

奉結の赤手拭や春の風 (子規選)

若草の土手を離れぬ胡蝶かな (子規選)

などはその時に成つた句であるが、いずれも「春」の生気に鋭い感受性を震わしたもので、その表現は趣向性に富んで楽しく、同時に多彩で巧みである。このような句作姿勢は彼の俳諧の一傾向となり、日本派の作風に相違はなく、物事をよく観察し實際のありのままを写すという子規の写生論に一致しているといえる。

子規庵での蘇山人の活動は、彼が清国政府の命を受け帰国を余儀なくされた明治三三年(一九〇〇)の夏頃までに続いたのであるが、その間、彼は頻繁に子規庵に出入りし、虚子・碧梧桐ら日本派の人々と交流を深めながら、子規から蕪村俳諧の心を学び、独自の句作法を完成させるに至つたのである。

三、蕪村俳諧の受容について

蘇山人が本格的に蕪村俳諧に関わつたことを最初に見て取れるのは、明治三三年(一八九九)二月二四日、東京の子規庵で開かれた第三回蕪村忌句会からである。

その日は狭い子規庵に五十人近くの人が集まって、長老の内藤鳴雪や坂本四方太は床の間上がるほどの空前の盛会で、名物の

風呂吹も一片ずだったということであった。いつものように辯髪に中国服、まさに百緑中の紅一点ともいふべき蘇山人は俳席の一隅に異彩を放っていたのである。恒例の句会において彼は、

蕪村忌や蕪村の偽筆掛けて見る

蕪村忌や住びて几童のあはれ也

蕪村忌や人入り乱れ根岸庵

というように、「蕪村忌」などを季題にして十数句を詠じ、蕪村調たつぶりの諧謔趣味を的確に表現した。句法や句調について句の勢いを大事にし、意識的に斬新な用法を取り入れたのは、彼が子規を通して蕪村調に傾倒し、いち早くそれを消化しようと試みていたことを思わせる。

周知のとおり、蕪村が五五歳（一七七一年）から十年間もかけて完成した独自の蕪村調は、絵の心を俳諧に取り入れてさらに華やかな古典の情趣、古語と漢語を盛り込み、多彩で幻想的・耽美的な俳風であった。とくに漢詩を意識的に尊重し、広く知られる中国詩人の詩句を裁ち入れることによって、その詩藻の拡張や深化をはかったばかりでなく、多彩な句風を樹立した。たとえば、

夕風や水背鷺の脛をうつ（王維「樂家瀬」）

ところてん逆しまに銀河三千尺（李白「望廬山瀑布」）

夏草や兵どもが夢の跡（杜甫「春望」）
半江の斜日片雲の時雨哉（白居易「暮江吟」）

などはいずれも漢詩仕立ての句であるが、その上に日本の風物を漢詩風に意匠し、景情・表現ともにまさに「仮名書きの詩」と言えよう。

しかし、子規の時代まで、蕪村といえは画家としてのほうが有名であり、彼の俳句は漢詩漢語を多用した風変わりな作品だとして、必ずしも高く評価されていなかった。明治時代に蕪村を発見した子規はそんな蕪村の句風を新しい観点から取上げることによって、芭蕉と並び立つべき偉大な俳人として位置づけ直したのである。「俳人蕪村」の中で子規は、蕪村の句法について（蕪村は句法の上に種々の工夫を試み或は漢詩的に或は古文的に、古人の未だ曾て作らざりし者を数多造り出せり」と述べ、蕪村句法に現れた漢詩受容を認識し評価した。さらに俳句と漢詩との趣向の極めて類似することから論及して次のように説いた。

「俳句と和歌と漢詩と形を異にして趣を同うす。中にも俳句と漢詩殊に似たる處多きは、俳句が力を漢詩に藉りしにも因るべきか。（中略）漢詩を解する者往々にして俳句を解せざる者あり。こは俳句を見るに漢詩を見るの標準を用ゐざる故なり。余も久しく漢詩を見るの標準を誤りしが、一旦俳句と漢詩と二

致あるに非るを悟るや、疑團氷解して始めて漢詩の真相を認め得たる心地す。」

〔俳句と漢詩〕新聞「日本」、明三〇・二・四

こうした中国古典や歴史に素材構想を求め、客観的態度で印象鮮明な句を詠んだ蕪村の俳風と同じく芸術の基盤を成すものとして漢詩文を意識的に重視する子規の思想は、当然のことながら、青年俳人蘇山人に大きな影響を与えていたに違いない。子規と同様に、蘇山人は病弱な身体でありながら、蕪村調の俳句に大きな興味を抱き、俳句と漢詩を見事に融合し、多様で新鮮な句作を志していたのである。

次に例を挙げて蘇山人句における蕪村調受容の軌跡をたどってみよう。

蘇山人は漢詩の投書家として出発したのである。彼が当初熱心に取り込んだのは実は漢詩であった。この頃、彼は漢詩の創作を通して文学の道を何かつかめるのではないかと、さまざまな努力をする中で自己の可能性を広げようとした。蘇山人が漢詩を作るようになった時期については詳かではないが、最初の漢詩として伝わるのは、次の一首である。

之字溪流曲折間。紅橋斷處是青山。

兩行綠樹三叉路。聽得瀑聲不肯還。

これは蘇山人が十六歳の時の作品で、雑誌「文華」第三号（明三〇・一）の漢詩欄に掲載された。稚拙で未熟なものであるが、自然をよく観察し、身近な景色を捉えて詠じた穏やかな詩風となる。続いての「観月」「観雪」「探梅」なども同じように自然の景物を題としたものであるが、句法や詩語に巧みで、景情が清澄し格調も高雅するようになり、たびたび課題入賞に選ばれるなど、明治随一の漢詩家野口寧斎からは高く評価されている。

ところが、明治三一年（一八九八）頃を境に、蘇山人の文学趣向は時代の流れに合わせながら大きな変貌を遂げる。それまでは主として漢詩にのみ偏していた蘇山人の作品の行き方が、漢詩と平行して次第に俳句の創作をも試みるようになる。その直接的な誘因としては、日本派など俳壇における新俳句の革新運動に影響されていたと考えられる。

蘇山人の句は漢詩文趣味的なものが多く、歴史的事件や人物を題として詠ずる詠史詩が好んで詠まれた。とくに彼は生まれ故郷の蘇州一町・田舎、それらを取り巻く風土・自然・歴史・その生活・伝承、善意の人たち―を句作展開の重要な資料として用い、故郷に対する限らない愛着を表しているのである。

ちなみに「蘇山人」という俳号は「蘇州」に由来するとも言われているが、その根拠とするところは、（蘇山人羅朝斌は清國蘇州の人なり、長く日本に在りて、小説をよくし、俳句亦上手なり。）

〔文藝倶楽部〕六卷七編、明三三・五と書いた彼の友人三宅青軒の記述があった一方、蘇山人自身も俳句小説童話などを問わず、作品を発表するとき、しばしば名前の前に「清国」「清国人」「清客」などの肩書をつけるが、「古呉」「江南」「江東」など蘇州の古称に因んだ言葉も彼がよく使ったものである。つまり、「蘇山人」の号が背負うものは、故国・故郷への愛であり、それが彼の作品のベースにあるものであると思われる。

朝霧や兵船に太鼓鳴る

霧はれて呉船魏管野箭を得たり

城見えて寒月高し呉の流れ

鱸魚買はん呉人の杖に鱗蛉かな

素材的に見ても、「朝霧や」「霧はれて」の二句は魏呉蜀の三国の紀伝体歴史書として日本でもよく知られる有名な『三国志』の「諸葛孔明が草船を以って箭を借りる説話」にヒントを得ているが、壮大な歴史的場面をわずか十七文字で表現したことは、作者が歴史に精通しその素材を自由自在に駆使する非凡な才能を窺わせるものにはかならない。「城見えて」の句は唐の詩人杜甫鶴の詩「送友人遊呉」を、「鱸魚買はん」の句は「蒙求」「張翰適意」の話をそれぞれに踏まえて生まれた秀作である。

そればかりではなく、また蘇山人は日本人々に熟知されていた

る漢詩の名句の翻案から、応用・意識・融合などさまざまな方法を駆使して数多くの俳句を作ったのである。その二三を拾って見よう。

琴を抱きて蜀の僧行くまかな

月更けて仙女と語る芙蓉かな

五月雨や汨羅の水のうす濁り

古池や蟻を楚客の一葉舟

などはいずれも中国古典の持ち味たる美的凝縮性や含蓄力・写実性などを、最小詩形の俳句に移すことを通して、その時空間の拡大や表現の可能性を向上させ、斬新なイメージの獲得につなげていこうとしたものである。

「琴を抱きて」「月更けて」の二句は李白の詩想を踏んだのであるが、前者は「聽蜀僧浚彈琴」の「蜀僧抱綠綺、西下峨嵋峯。…不覺碧山暮、秋雲暗幾重」を応用したものとと思われる。黄昏という薄暗い情景の中で秋の芒が浮かび立っている山の小道を、琴を抱きながら急いで行く蜀僧の姿が思い浮かべられると同時に、一抹の哀愁が漂われる。これに対し後者は「廬山謠・寄盧侍御虛舟」の一句「遙見仙人綵雲裏、手把芙蓉朝玉京」あたりから想を得たもので、句の風景はリアルというよりも理想化されたものになって明快で空想の雰囲気を感じ上げていっているのである。

一方、「五月雨や」の句は「屈原説話」に拠ったもので、世相の動乱、人間の悲劇を伝えるのである。楚の愛国詩人屈原は救国の情熱を持っていたがかなわず、汨羅江に投身して人生の幕を閉じたという話であるが、それは今の時代に、また自らに重なるものがある。このあたりに蘇山人の胸にひろがった波紋が感じられる。「古池や」の句は、白居易「別楊諫士・盧克柔・殷纒菴」の「獨有行路子、悠悠不知還。人生苦營營、終日羣動間。所務雖不同、回帰於不閑。扁舟來楚鄉、疋馬往秦関。」に素材を得ていながらも、蘇山人はそれを巧みに換骨奪胎させ、蟻を楚客に見立てて、しみじみとした人生の侘しさを感じ取ろうとしている。空想は現実から遊離せず、古典趣味と伝奇空想の世界を現実の中に混然と融合させて作者の実感としている点に蕪村俳諧の特徴が窺える。

ここで注目したいのは、その中には、漢詩と俳句の同一主題のコラボレーション（共演）による濃い香りの漂う一連の作品があるということである。漢詩と同一主題のもとに、俳句が作られるようになったのは、蘇山人にとっては全く新しい展開であった。

海棠や楊家の娘人となり

「雨中賞海棠」

花開深院潤新泥、彷彿丹霞拂地底。

酣睡十分春意足、淡粧半面曉煙迷。

綠章上奏今宵祝、紅燭高烧昨夜拋。
最妬雨聲將作祟、杜鵑頻向耳邊啼。

はどちらも白居易「長恨歌」の「楊家有女初長成、養在深宮人未識」からヒントを得たと思われるが、「海棠や」の句は、「海棠」とか「楊家」とか「人となり」といった言葉を用い、唐の玄宗皇帝に寵愛された楊貴妃の艶姿を詠んでいる。季語の「海棠」は「睡花」の別名もあり、玄宗皇帝が楊貴妃にまだ酔っているのかと尋ねたとき、彼女が「海棠の睡りいまだ覚めず」と答えたという故事からの命名だという。日本では、「海棠の雨に濡れた風情」などといったように、美しい女性の形容によく使われる。この「睡花」という感覚が日本の俳人たちにも好かれたらしく、蘇山人以前、女圃に「かいどうも共にいねぶる胡蝶かな」があり、蕪村に「海棠や白粉に紅をあやまてる」がある。また同時代の子規にも「海棠の珠顔に見ゆる笑くば哉」などが見える。

白詩の句法または詩語をそのまま受容し、漢詩風に意匠することを好んでいる俳句に較べると、漢詩の方は独自の世界を歌い、創意を同じくしながらも、気品の高い純粹感を意識的に力強く出しているのである。この詩は海棠を詠じて海棠の文字を用いず、象徴的にその神を写そうとする技法は凡手ならざるものがあり、さすがの漢詩家野口寧斎にも感心され、〈字字穩句、称量得宜、可謂物入妙〉（『文華』第九号、明三・五）と称揚されたので

あつた。

寒夜史に泣くや燈火豆の如

「寒夜讀史」

寒風漸溼夜窓虛。憤淚欲澆燈下晷。

不是秦庭三日哭。方城漢水絳邱墟。

これは言うまでもなく、敗亡と戦禍の悲哀をなめつくした故國を詠う詩句である。わが境遇に照らして史書を読み返し、「秦庭」「漢水」中国のことを思い起こして憂國の情がますます深くなり、思わず落涙した。この作品が作られた明治三二年（一八九九）前後には、列國の中國侵略に反抗する義和團が蜂起し、それを日本や欧米列強八カ國の軍が共同出兵で鎮圧したいわゆる北清事件が起こつた。滅び行く祖國の前途への憂慮を覚え、断腸の思いと悲壯な誠心がにじみ出ているこの詩句は、蘇山人の意識の深層に根深く横たわる心情の一面を代表しているのではないかと思われる。

四、蕪村句との比較的研究

さうに蕪村と蘇山人との間には、同じく漢詩文の詩想を踏んでいても、主題・句風・趣味など追求と表現においては随分違い、

それぞれ漢詩文に対する独自の理解によって、全く異なつた句境や情趣を描き出しているのである。たとえば、

秋風の呉人はしらずふくと汁

蕪村

鱈魚買はん呉人の杖に蛸蛤かな

蘇山人

の二句はその詩想が「蒙求」「張翰適意」の話から得られたのではないかと思われる。晋の張翰は呉人であるが、才力が卓抜であつたので、出世して洛陽で高官になつた。ところが、秋風の起るを見て、呉の鱈のおいしさを思う氣持ちがつのり、ついに名譽も地位も捨てて故郷に帰つたという話である。蕪村の句には、鱈の鱈と河豚汁とを対照して、張翰は知らない日本の河豚料理の味も呉國の鱈の鱈に匹敵するほど美味しいと、軽妙で洒落れたうえ、日本趣味を加えて独特の意境を打ち出した心意が見られる。これに対し蘇山人も呉人であつたので、晋の張翰と同じような感慨を持つている。異國の日本で秋風の音を聞いて、故郷の鱈の鱈を思い出すが、しかし自分が日本を離れて祖國に帰ることはできない。作者の故郷を思う思慕の念と寂寥感が伝わってくるような句で、當時の蘇山人の心境が十分に窺われる。

辻堂に死せる人あり麦の秋

蕪村

乞食の飢え死したり堂の雪

蘇山人

この二句に唐の詩人杜甫『自京赴奉先詠懷五百字』の「朱門酒肉臭、路有凍死骨。榮枯呖尺異、惆悵難再述。」の受容が看取される。優劣は措くとして両者の詩想や表現の相違がこのあたりからすでに現れているといえるであろう。蕪村の句は、場面を巧く変化して独自の俳諧味を作り出し、句調にも新味が見出せることになる。麦刈の時、道端の仏堂の前で一人の男が倒れて死んでしまった。彼は餓えて死んだのだらう、との意である。上五の「辻堂」は衆生済度、大慈大悲を施す場所であり、下五の「麦の秋」は収穫の季節を表して、一見のどかな田園風光のように見えるが、作者は中七に「死せる人あり」を置いて、「明と暗」「生と死」「喜と悲」という鮮明なイメージを対義的な言葉によって喚起することに成功した。まったく無関係に見える二つの事象を連想作用により完全に融合させたところに、蕪村の卓抜なユーモアとペーソスが感じられる。

蘇山人の句は蕪村の句に暗示を得たと考えられるが、思想性が表面に出していない蕪村句とは異なる風格を呈している。富人たちが暖衣飽食、詩歌管弦の遊びを日夜盛大に繰りひろげていた。しかし、その外では路ばたに凍死した人の死体が横たわっているとの意である。上五には「乞食」を、下五には「堂の雪」を用いて対照的効果を狙うが、中七には動詞の「凍え死したり」を挟んで主題を強調し、愛憎の感情を強く吐露するとともに、矛盾に満

ちた社会現実を憂慮しているのである。哀切の情から厳しい現実を見据えた句境への深化が印象的である。

また、李白『子夜呉歌』の「長安一片月、万戸捲衣聲。秋風吹不盡、總是玉關情。何日平胡虜、良人罷遠征」を借用して、次の俳句が生まれていると思われる。

異夫の衣捲つらん小家かち

蕪村

月落ちて枕にひやく砧かな

蘇山人

「姑蘇」は今の蘇州である。蘇州人としての蘇山人は常に故郷の風物を夢見ている。秋が深まり、月が西の方に沈み、空には一面に濃い霜がかかっている。冷たい布団の中に潜り込んだが、なかなか眠れない。なぜなら、町のあちこちには砧を打つ音が聞こえてくるからだ。水の辺りで砧を打っている女たちは、戰場へ遠征する夫のことを想っているのだらう。賃仕事で他人の夫の着物を打つ貧しい小家の女性の情を哀れむ蕪村の句に比べて、蘇山人の句は人間に深く刻印した戦乱の惨禍と痛苦を鮮やかに表現し、歴史の重みを感じさせているのである。

同じ詩想を詠じたものには、他にも杜牧「泊秦淮」の「煙籠寒水月籠沙、夜泊秦淮近酒家。商女不知亡國恨、隔江猶唱後庭花」を踏んだ。

砧打つ向かひは秦淮の酒屋かな 蘇山人

という句がある。後半の「商女不知亡国恨、隔江猶唱後庭花」に換えるに、「砧打つ」の初五を以てしたために、句境はおのずから別趣清新なものとなる。風俗社会を象徴する秦淮河を境に、こちら側には川の辺りで戰場へ出征する夫のために衣を打つ女たちが苦しんでいるが、しかし、これと皮肉な対照をなしている、亡国の恨みの歌とは知らぬげに歌う遊女たちの華やいだ声が川の向こうからは聞こえてきた。「砧打つ」妻たちと「秦淮」の商女、「戦争」と「平和」が隣り合わせになり、ミスマッチして奇形な状況を見せていた。蘇山人は、国家がいま興亡の危急に立たされていることについて人々に警鐘を鳴らそうとしたと思われる。

秋風や酒肆に詩うたふ漁者樵者 蕪村
山村の酒家の旗やはるのあめ 蘇山人

二句とも杜牧『江南春』の「千里鶯啼緑映紅、水村山郭酒旗風。南朝四百八十寺、多少樓台煙雨中」の詩想を生かした作品である。杜牧の詩は春の情景を描いたのであるが、蕪村はそれを秋に転換するとともに、詩境を俳諧化し、粗末な居酒屋を「酒肆」といい、漁夫や木樵を「漁者樵者」といい、また卑俗な唄を「詩」といっように、内容と表現の反発による俳諧味を期待して、田園情趣

や秋意昂扬とした気分を醸し出している。一方、蘇山人は詩の第二句「水村山郭酒旗風」を生かし、それに「春の雨」を配合して、温暖で風光明媚な江南地方の春の風情を的確に詠っている。蕪村の句は「動」を主とし、賑やかな雰囲気を感じさせるのに対し、蘇山人の句は「静」によって渾然とした調和をたもち、鋭敏な色彩感覚を駆使して詩情優雅な雰囲気をはんのりと描き出しているのが大きな特徴である。

五、結語

以上のような考察から、漢詩文がいかに蘇山人の俳句を生む豊かな源泉となっていたかが窺える。蘇山人は、こうして一方に漢詩文の影響を受けながら、一方では蕪村など俳句の伝統に深く関わっていたのであり、この伝統の中に漢詩文を収めるとともに、わが境遇に照らして独特の俳風を生んで行くことこそが、彼における受容であった。こうした独自の句作法は、蘇山人を明治俳壇において特殊な存在とさせたのである。

要するに、蕪村や子規なども漢詩文の教養の上に立って拔群であるが、著しく知識的であり、いわば学者的教養的であって表面的である。蘇山人ほど、しんから漢詩文を吸収し、それに生き、悩み、作品を書いた人は他になかったと言って言いすぎではなからう。

明治三三年（一八九〇）初夏、滅亡の危機に瀕する祖国を憂え

る蘇山人は、富国強兵を旨指す産業改革などを積極的に推進する洋務派官僚であり湖広総督である張之洞からの要請を受けて帰国し、湖北省の官衙に赴任した。やがて気管を病み、再び日本に来て休養したが、幾何もなくしてその翌々年の三月に東京赤坂の寓所に歿した。

その訃報を聞いた子規は、「蝶飛ぶや蘇山人の魂遊ぶらん」「陽炎や日本の土に預」と詠んで彼の死を悼み、虚子も「春雨や唐撫子の死を惜む」の句を手がけた。蘇山人と親交があった荷風は随筆『日和下駄』には、「わたしは富士の眺望よりしてたまたま蘇山人が留別の一句を想い惆悵としてその人を憶うて止まない。君は今鶴にや乗らん富士の雪」云々という記述もある。

なお、明治舞壇における蘇山人の位置づけについては、彼を「俳句を作る初めての外国人」として捉えて考えることが当然であるが、筆者は（其の交つてあるといふことが俳句の隆盛を思はせた）『柿二つ』新聞『東京朝日新聞』大四・一〇四」という虚子の発言に注目して、その果たした役割を今後の課題として検討していきたいと思う。

(りゅう げい 中国・徐州師範大学特任教授)

テキスト

1. 村山古郷編『蘇山人俳句集』『現代俳句集成2』河出書房新社 一九八二・八
2. 俳誌「ほと、ぎす」第二巻一号（第六巻四号）ほと、ぎす発行所 明三二・一〇（明三五・一二）

3. 『与謝蕪村全集』全七巻 講談社 一九九二・五―一九九五・四
4. 正岡子規『俳人蕪村』俳書社 明三二・一一
5. 『正岡子規全集』全三巻 講談社 昭五〇・一二―昭五三・三

参考文献

1. 中村忠行「辨髪の俳人蘇山人」『子規全集』一六巻月報五 講談社 一九七五・八

2. 王若『与謝蕪村の日中比較文学的研究』和泉書院 二〇〇六・二

3. 仁枝忠『俳文学と漢文学』笠間書院 一九七八・二

4. 坪内稔典『子規山脈』日本放送出版協会 一九九七・一〇

5. 加藤固安『漢詩人子規―俳句開眼の土壌―』研文出版 二〇〇六・一〇

研究室受贈図書雑誌目録V

岡山大学 国語研究（岡山大学教育学部国語研究会）二四

香川大学国文研究（香川大学国文学会）三四

学術研究 ―国語・国文学編―（早稲田大学教育学部）五八